

〈巻頭言〉

コンパスの効用

図書館長・教授 大内文雄 (東洋史〈中国史・中国仏教史〉)

2年前、2005年を迎えるころから、「60年」を言われることが多くなった。特に隣国では、時の日本政府の顔がどの方向に向けられているのか、に対して、いささか尖鋭に過ぎる言動があり、その原因をつくった日本の側にも反発への過剰反応が見られた。その潮流は今も続いている。そして現在、憲法施行60年、と言うことで、改憲論議がかまびすしい。今一つ、このごろよく聞く言葉に、「団塊世代の大量退職」がある。これも60歳の定年を迎えることが、社会現象として捉えられている結果である。

この「60年」に対する注目は、もちろん欧米にはない習慣による。いわゆる還暦であり、その意味も、元来はめでたいこととしたが、今は一巡りしての時間の経過のほうに意味が傾いているようである。憲法施行60年と言う場合、ことに政府・与党側から出てくる論調に、それが強い。要するに、これ程に時間が経ったのだから、とする思いが基層低音としてある。一方の護憲論者は、これ程に時間が経ったこと、に対して正反対の価値を見いだす。それぞれの価値観と判断に固執して、議論に接点がなく噛み合わない。

(敗) 戦後60年や今回の憲法施行60年の議論には、いづれも、敗戦時の1945年、憲法施行時の1947年を起点とし、起点から現在までの時間の長さを当面の話題とする感覚しかない。そこには起点を終点とする見方がない。

60年を言うなら、起点を終点として同じ60年を溯り、120年前を起点とする終点—1947年が意味するものを考える。少なくともその程度の、視野の拡大への意識はあってよい。それは日本のマスコミや政府に関わる人だけ

ではなく、隣国のマスコミや政府を構成する人にも不可欠の資質であるし、それぞれの国の人々にも意識されてよい歴史感覚である。

いわゆる団塊世代に関する話題にしても、60年の経過だけを言うのではなく、その世代が生をうけた時点を終点として考えてみる。その60年前、1887年には両親は生まれていない。その時は、祖父母すらまだ生まれていないかも知れないほど遠い。しかし1947年とは近代日本の一つの終点である惨憺たる戦争の結果、すなわち戦争のない日常をようやく現実とし得て日本にもたらされたのである。現憲法の施行にはそういう背景があるし、その世代にはそういう意味がある。

インド5千年、中華4千年を誇るならば、同様の考え方をしてみよう。時間の長さをコンパスで計り、起点に片足を置いて、そのまま180度向こう側に、現時点に置かれているコンパスの足を振り向ける。こうイメージするだけで、議論上の余計な夾雑物が余程取り除かれるのではないか。

その上で、歴史記録をひもといてみる。なにを事実とするか、そもそも事実とは何か。これら人文学研究のために図書館はある。言わずもがなのことではあるけれど。